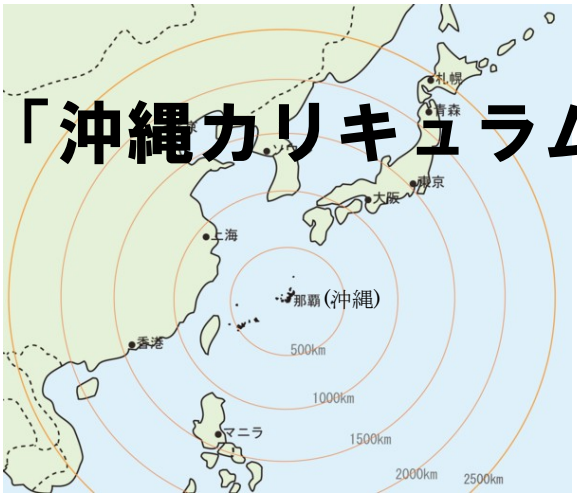
2011 年 10 月発行



「沖縄カリキュラム開発研究ニュース」 No.3

沖縄カリキュラム開発研究会
事務局：〒902-0075　沖縄県那覇市国場 405
沖縄女子短期大学記念館
岐阜女子大学 大学院（沖縄サテライト校）
文化創造学研究科内
TEL　098-835-4681　　FAX　098-835-4682

教育実践での PDCA サイクルの課題（１）

今回、文部科学省中教審教育課程部会「児童・生徒の学習評価の在り方について*」（平成 22 年 3 月）で、PDCA サイクルの必要性が言及されている。

教育実践研究での計画・実施・評価・改善のサイクルは、昔から言われてきた。とくに、カリキュラム開発研究として、School based Curriculum development（学校に基礎をおくカリキュラム開発）「学習者中心の教育体制」が提案され出し、PDCA サイクルの実践研究の必要性が出てきた。

ただ、カリキュラムの開発は、国、地方、学校等が各レベルで相互に分担と協力で行われる。

その実践では、授業計画、実施、評価、改善がなされ、螺旋状に毎年よりよいカリキュラムとして構成する方法の研究が続けられてきた。一方、個の学習者については、「育ち」の観点から PDCA サイクルの検討が必要である。

（＊）文部科学省中央教育審議会教育課程部会
「児童・生徒の学習評価の在り方について（報告）」
（学習評価を踏まえた教育活動の改善の重要性）

各学校における学習評価は，学習指導の改善や学校における教育課程全体の改善に向けた取組と効果的に結び付け，学習指導に係る PDCA サイクルの中で適切に実施されることが重要である。

○　すなわち，教師や学校にとっては，
【1】　学校における教育課程の編成や，それに基づいた各教科等の学習指導の目標や内容のほか，評価規準や評価方法等，評価の計画も含めた指導計画や指導案の組織的な作成
【2】　指導計画を踏まえた教育活動の実施
【3】　児童生徒の学習状況の評価，それを踏まえた授業や指導計画等の評価
【4】　評価を踏まえた授業改善や個に応じた指導の充実，指導計画等の改善
といった，Plan（【1】），Do（【2】），Check（【3】），Action（【4】）の PDCA サイクルを確立することが重要である。
このような PDCA サイクルは，日常の授業，単元等の指導，学校における教育活動全体等の様々な段階で繰り返されながら展開されるものである。学習評価を通じて，教師が授業の中で児童生徒の反応を見ながら学習指導の在り方を見直したり，一連の授業の中で個に応じた指導を図る時間を設けたりすることや，学校における教育活動を組織として改善したりしていくこと等が求められる。

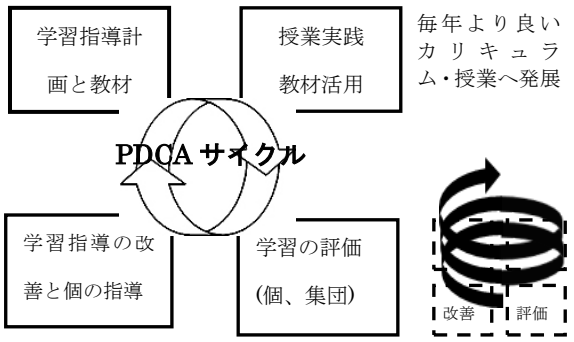
○　このような学習指導に係る PDCA サイクルは，学校評価全体の枠組みの中で適切に位置付けられ，実施されることが必要である。
各教科等の学習評価を通じて，例えば，思考力・判断力・表現力等に課題があることが明らかになれば，それらをはぐくむ学習活動を学校の教育課程全体の中で推進する等，学習評価を個々の授業の改善に加え，学校における教育活動全体の改善に結びつけることが重要であり，そういった取組を学校評価の枠組みを通じて行うことが考えられる。

○　児童生徒にとって，学習評価は，自らの学習状況に気付き，その後の学習や発達・成長が促される契機となるべきものである。
また，学習評価の結果を保護者に適切に伝えることは，学習評価に関する信頼を高めるものであるとともに，家庭における学習を児童生徒に促す契機ともなる。

○　なお，児童生徒が行う自己評価や相互評価は，児童生徒の学習活動であり，教師が行う評価活動ではないが，児童生徒が自身のよい点や可能性について気付くことを通じ，主体的に学ぶ意欲を高めること等学習の在り方を改善していくことに役立つことから，積極的に取り組んでいくことも重要である。
また，児童生徒の自己評価を学校評価においても反映し，学校運営の改善につなげていくことも考えられる。

授業の計画・実施と結果の記述

学習指導に係る PDCA サイクルは図に示すように、目標、計画、実践（実施）、評価・改善が一つのサイクルとして、それが螺旋状に毎年よりよいカリキュラムとして構成される。



PDCA サイクルで螺旋状で毎年発展

このとき、目標・計画、実施の結果などの記述の方法としていろいろな工夫がされてきた。その代表的な事例について示す。

（1）学習指導の目標の記述

学習指導の目標の記述は、一般的に文書表現が多いが、学習内容と学習行動のクロス表としての表示がされることが多い。たとえば、例に示すように、Bloom 等による学習内容・目標細目表もその一例である。

この学習内容と学習行動の関係は、［　　］が［　　］できると具体的な学習指導の目標が表示される。この学習指導の目標は、一般に単元、学期、学年等の期間、または教科全体を対象として設定される。（尚、この学習行動の記述については、各教科等で多くの研究がなされてきた。また、観点別評価等との関係も検討する必要がある。）

学習評価・・・目標に準拠した評価

学習指導の目標が決まれば、一連の学習活動での結果に対し、「目標に準拠した評価」がなされてきた。表 2 で示す行動的目標に照らした評価として、J.M.アトキンは、評価アイテムのプールの中から適した問題等を選択している。

多くの問題等の中から目標に適した評価問題等を選択するとき、評価の妥当性と信頼性が問われている。一方、個の評価には、１人ひとりの特性を知り、「育てる」教育的な配慮も必要である。

表１　学習内容行動の細目表　言語能力の細目表（例）

学習行動 / 学習内容	認知的活動領域													情意的領域					
	A.0 知識					B.0 理解		C.0 分析			D.0 応用		E.0 評価		F.0 態度		G.0 受容		H.0 参加	
	A.1 用語の知識	A.2 個々の事実についての知識	A.3 慣用やきまりについての知識	A.4 分類と範疇化についての知識	A.5 基準についての知識	B.1 言いかえ	B.2 解釈	C.1 要素の分析	C.2 関係の分析	C.3 組織原理の分析	D.1 機能上の応用	D.2 表現上の応用	E.1 客観的評価	E.2 主観的評価	F.1 受入れ的態度	F.2 鑑賞・価値づけ	G.1 意識すること	G.2 選択的に注意を払うこと	H.1 意欲的な参加	H.2 参加の享受

訳
梶田叡一・渋谷憲一・藤田恵璽、教育評価法ハンドブック、第一法規
学習評価ハンドブック（上・下）、第一法規

"Handbook on Formative and Summative Evaluation of Student Lerning"
by Benjamin S. Bloom, J. Thomas Hastings, & George F. Madaus.

参考（教育環境：学習者・教師の特性・能力等を考慮し、計画に対応し単元または時間・内容等の区切りで構成）

	学習内容・行動目標	目標に準拠した評価	指導の内容			
学習のプロセス						

・妥当な調査項目（Item Bank から取り出す）
・評価の方法
・処理の方法
← 妥当性と信頼性

（２）授業計画細目表

学習指導の目標が、学習内容と学習行動で内容について行動○○ができるようになるのように表示されると、それを実践するための計画が考案される。このとき、表２の例に示すように、学習指導のプロセスを組織的に構成する授業と総合的な学習活動を中心にした授業では、計画の立て方（授業案）にも違いがでてくる。表２は、その代表的な指導の違いの例である。学習指導の目標を授業の計画へ進めるため、基本的な学習活動、教授活動、教材、評価、処方について検討するため、授業計画細目表（岩崎）等が作られてきた。

この表では、わかる、できる、考え方、見方、学習力と学習者・教師の活動の関係で授業計画の立案をするときの参考になる。(各枠には具体的な内容を表示）行のア、イ、ウ、エ、オの学習行動は、観点別評価等も参考にしてそれぞれの教科分野での研究が必要である。

カリキュラム開発に関する国際セミナー報告書
「カリキュラム開発の課題」
昭和 50 年（1975 年）より

「工学的接近」と「羅生門的接近」の対比（1）
―― 一般的手続き ――

工学的接近 (technological approach)	羅生門的接近 (rashomon approach)
一般的目標(general objectives)	一般的目標(general objectives)
↓	↓
特殊目標(specific objectives)	創造的教授・学習活動(creative teaching-learning activities)
↓	↓
「行動的目標」(behavioral objectives)	記述（description）
↓	↓
教材(teaching materials)	一般的目標に照らした判断評価 (judgement against general objectives)
↓	
教授・学習過程(teaching-learning processes)	
↓	
行動的目標に照らした評価。 (evaluation based upon behavioral objectives)	

「工学的接近」と「羅生門的接近」の対比（3）
――目標，教材，教授・学習過程――

	工学的接近	羅生門的接近
目　標	「行動的目標を」(behavioral objectives) 「特殊的であれ」(be specific!)	「非行動的目標を」(non-behavioral objectives) 「一般的であれ」(be general!)
教　材	教材のプールからサンプルし，計画配せよ。 (sampling from material pool and "planned allocation")	教授学習過程の中で教材の価値を発的に配見せよ。 (discovering the value of materials in teaching-learning processes)
教授学習過程	既定のコースをたどる (predecided)	即興を重視する。 (impromptu)
強調点	教材の精選，配列 (design of teaching materials)	教員養成 (teacher training, in-service training)

表２　カリキュラムと指導

授業計画細目表（１時間・単元用）

	１　学習目標	２　学習活動	３　教授活動	４　教材・資料・機器	５　評価	６　処方
ア わかる	ア１	ア２	ア３	ア４	ア５	ア６
イ できる	イ１	イ２	イ３	イ４	イ５	イ６
ウ 考え方	ウ１	ウ２	ウ３	ウ４	ウ５	ウ６
エ 見方	エ１	エ２	エ３	エ４	エ５	エ６
オ 学習力	オ１	オ２	オ３	オ４	オ５	オ６

（教材の資料番号記入）（評価問題の資料番号記入）（処方学習の資料番号記入）

表３　指導計画細目表

岩崎　潔

（３）指導の計画と結果の表示

授業の計画とそれに対する授業の結果を表示する方法としては、多くの研究がされてきている。

一つの例として、国立教育政策研究所の教育情報センターで、全国からの授業案と教材を集め、提供していた授業結果の記入表を一部変更・追加した例を示す。最近は、これらの各表や具体的な教材がデジタルデータとして記録されていて、多くの教員が利用している。このような方法で記録しておけば、次年での利用・発展に役立てることができる。今回、授業の PDCA サイクルを進めるとき、学習の目標から授業結果を記録する参考資料として紹介した。

（文責　後藤）

授業結果の資料

記入者　学校名（グループ）：　　氏名：

タイトル（表題）	
見出し（キャッチコピー）	
概要（400 字以内）	
キーワード	
校種	
学年	
教科	
学習指導要領の項目番号	
地域・時代・季節（地域・時代・季節に関連あるときのみ記入）	
実施属性	県　市 学校　教諭 年　月　校時
校時数（授業時間）	
目標	
前回までの主な活動（特に条件の必要なときのみ）	

（国研の授業結果の記入表を参考）

学習展開（各学校、グループの様式利用でも可、教材に番号を付ける）

課程	学習内容・活動	指導上の留意点	評価・配慮・事項	教材（番号）
導入				
展開				
まとめ				

評価基準・方法	
評価結果	
留意事項（指導・利用）	
改善点（反省も含め）	
使用する教材・教具	

具体的な教材（テキスト、提示教材・学習材・評価など）
（学習展開記入表の教材番号を教材等に記入）

（具体的な教材をデジタル化して記録）

表４　授業計画・結果の記入表